

《座談会》

二十一世紀の私学と同志社

出席者（A B C 順）

大学神学部教授	深田 未来 生
大学理工学研究所教授	市川 亀 久 彌
女子大学教授	荻 野 恕 三 郎
高等学校教諭	浦 野 信 夫
（司会）	榊 原 胖 夫
	（大学経済学部教授）



〔とりあげるべき問題〕

榊原（司会） 本日はお忙しいところをお集りいただきありがとうございます。ただいまから、「二十一世紀の私学と同志社」というテーマで同志社時報の座談会を開かせていただきます。

「二十一世紀の私学と同志社」といいますといろんな種類の問題があるかと思っています。まず進学人口はどうなるだろうかという問題もございましょうし、進学者が高等教育に何を期待するかということも、二十一世紀までにはいろいろ変わると考えられる。また大学というのは教育機関であると同時に研究機関でございますから、研究というものが今後どういうふうになっていくかという種類の問題もございましょう。問題を数え上げればきりなくあると思いますけれども、同志社の場合工学部あるいは技術教育を今後どういうふうに考え、どういう方向で充実していくかという問題もありましょうし、さらには財政問題今日私学の財政は非常に窮屈になっておるわけですが、二十一世紀に向けてそれが楽になると期待するのは無理であろうと思います。

また同志社におきましては、建学の理念にかかわる問題でございますけれども、宗教教育をどうするか。これも今後社会がどう変わっていくかということにもかかわりがあるんでしようけれども、一般に世俗化に向けて進んでいる社会のなかであって、同志社の宗教教育が果たすべき意義といえますか、役割りというものがある。そういうものが何であるか。そしてわれわれは、そのなかでどういう教育をするのかというような点もあるかと思うのでございます。

思いつくままにいくつかの問題を並べてみたわけですが、さらにどういうような問題でここでディスカスするべきか、一、二サゼッションをいただいたらどうかと思います。

市川 題名は「二十一世紀の私学と同志社」ということになっておりますが、二〇年も先のことがわかる人は恐らくいるはずがないので、「二十一世紀にかけての同志社」ということで議論してもらおう。そう理解してよろこびますか。

榊原 そういう方向でいいのじゃないかと私は思いますが、昔は経済学でも「紀元二〇〇〇年の予測」なんていうのをしょっちゅう

ておったのでございますけど、最近はどうも予測は全部中期予測ないし短期予測という方向になっておりますから。

市川 言い出しっぱとして発言させていただきますと、二十一世紀へかけてというのは八〇年代からです。所で、私は一九八〇年代というのは、世界的な激動期だと見ておるんです。文明的にも、これほど大きな変化をもたらしした時代、あるいは、もたらそうとしている時代はないと思っています。同時に、日本もその一環として激動社会のなかに巻き込まれていまして、そのなかで私学同志社が、どういうふうに生き延びるか。むしろここでは、発展などというようことは、おこがましいのであって、新島先生以来一〇〇年続いた同志社が、どう生き延びて、教育機関としての役割りを果たし得るかということだと思っています。

そこでいけばん大事なものは、教育が荒廃に向かつて行っているのではないかということではないでしょうか。教育の荒廃の問題を十分議論せずして、二十一世紀へかけて私学はどうなるかという議論はできないと思っています。

荻野 どういう意図で二十一世紀というテ

ーマを選ばれたか知らないけれども、二十一世紀というのは二千年で、十八世紀が十九世紀になるというような問題じゃないに、千年単位の変化がありうるわけですね。いまぼくたちが教えている学生は、いずれ紀元二千年をあと二〇年後にもつわけです、たしかにぼくたちにとっては非常に遠い未来かもしれませんが、学生にとってはおそらく確実にあるだろう二千年であって、その二千年には千年単位の規模で生じる物の考え方の変革がくるんじゃないかと思うんです。

その意味で二十一世紀をどう受けとめるかということとは、ぼくたち教育者として考えなければならぬ責任がある問題だと思えます。そして教育者としてのぼくたちに要求されるのは十年単位とか百年単位の思考ではない、千年単位の物の考え方なのです。千年単位の物の考え方では立ち向かっていかないと、おそらくこれからの問題は解けない。目先の授業とか、教育の荒廃というような問題はたしかに現実の問題としては大きいですが、人類の歴史のなかで、千年単位でどういう変化があったかということを見ておく必要がある

るんじゃないか。

榊原 たいへんグローバルなお考えですけれども、現在われわれが教えている学生は、二十一世紀にかなり生きる人間であるという意味では二十一世紀にどういう人間が必要かということを考え、そのうえで現在の教育をおこなうということですね。

浦野 私は高校で倫社を教えています。そこに「現代社会」というテーマがあって、現代社会の特徴をいくつか挙げているんですね、大衆社会、産業社会、あるいは情報社会というふうな。とくに情報社会という方向は今後もしつそう強くなるというふうなことを教えておるんですけど、荻野さんのおっしゃるような、ごつい千年単位のはなしじゃなく



浦野 信夫 氏

て、いま予想されるところのこれからの社会の特徴というものの、そういうもののなかでどういうふうに生きていくかということをお教えないかという格好になっているわけなんですけれども、その段階で学校はどうあったらよいのか。

私どもの学校ではだいたい皆、卒業したら進学いたします。そこで私も大学というのはこれからどうあるべきかということをお私なりに考えざるをえないんですね。そこで問題を感じるのは大学の学部構成が、新しい社会に対応するのに現在のようなかたちでよいのかということですね。

大学は昔からそうですが、各専門部に分かれて非常に緻密な研究をなさるわけですけども、それがミクロ的な方向に行ってしまうと総合的な、まさにグローバルというか、マクロ的な対応が全然なされていない。これではたして次の世代の文化を担う者がつくれるのかという懸念をもつんです。財界で、企業がよくいろんな研究機関をつくっております。あれはやはり総合的につかんでいかなければ問題にたいする答がだせないということですから、大学ははたし

てそういう対応をしているか。きわめてミクロ的な領域でちゃんちゃんばらばらやってはるのところがうかと(笑)。

榊原 それはひとつの大きなテーマですから、あとでそれについてもすこし議論したらどうでしょうか。

深田 ぼくははじめからこのテーマが非常に恐ろしいテーマのような気がしています。二十一世紀といわれてもピンとこない。ただ二十一世紀に責任がないかということ、やはり責任はあるんですね。しかしその責任の重圧感というのは小さい。なにしろ、自分が働けるのはむこう二〇年間で、そのほうが比重として大きいものだから、二十一世紀まで考えるのはしんどい、むこう二〇年で四苦八苦という気持ちなんです。

ただ私学と同志社——ぼくは高校三年間を除いて私学の教育を受けてきましたから、私学に深い関心があるんです。けれども——ここでは私学に限定するよりも教育、二十一世紀の教育と言いかえたほうが意味があるような気がするんです。いったい教育とは何か。すごく抽象的に聞こえるのですが、さっき市川さんがおっしゃった教育の荒廃のなかで、

われわれは原点に立ちかえり教育というのは何なのか、どうあるべきかということを考えなければならぬと思うんですね。

それから、教育というのは、けっして教育制度としての学校にかぎらない、非常に広い意味での教育があるわけですが、それども、ぼくらは制度としての学校に所属していまこの問題を考えようとしている。傾向としては、いま浦野さんのお話しにあったように、すぐ大学に焦点が置かれる。同志社は一貫教育といっても小学校がないわけですね。それにはいろいろ歴史的な過去があったと思うけども、そのことも含めて教育制度としての学校同志社は、その教育の本質にかかわって、いまから二〇年を含めて、二十一世紀にかけてどうあり得るだろうというようなことを、すこし夢を描くようなことも含めて考えなくちゃいけないと自分に言い聞かせているわけですね。

夢を描こうと思っても、さしあたって二〇年どころか、ここ数年どうしようかといううなことにわりあいかわっているものですよ。なかなか頭が回転しないんですよ。

榊原 そのとおりだと思いますが、経済の

面から二〇世紀の最後の二〇年を想像してみますと、おそらく低成長の時代にはいるのではないかと思われます。それには資源の制約とか技術進歩率の低下という原因のほかに、価値感の多様化があって、所得をあげ物質的に豊かな生活をするということが人生の目標でなくなるといったことが大きいと思われるます。経済が低成長で安定するなら、それはまたそれでよいのですが、私は不安定性もまた増大すると思っています。

不安定な低経済成長下で大学はいままでのような拡大をとげるとは考えられないし、日本では出生率も一%前後、将来大学教育を受ける人のパーセンテージは多少上がるにしても進学人口は全体としてのびないと予想されます。したがって日本の私学の将来は明るいものとは思えないのです。

そこで進学者の高等教育の期待を裏きらない大学になるということが必要だろうと思います。さらに現在の教育至上主義、学歴主義みたいなものが、将来どう変わるかということによっても、私学にたいする需要の多様化が生じるだろうと思います。

〔二十一世紀とは〕

荻野 いまの榊原さんの予測は非常に目先の問題なんですよね。きょうのテーマは二十一世紀なんで、もう少しグローバルな見方をしたらどうでしょうか。

目先の問題でしたら、正直なところぼくはあまり関心がないんですよ。そういう点は社会学者とか自然科学者のほうが発言しやすい。ぼくらみたいな、いちおう思想なんかに関係している人間には、千年単位の問題を考えさせるようなことに関心がいきます。いわゆる未来学ということじゃないにね。

たとえば、さつき深田さんがおっしゃったように、教育というものは学校制度で、教育イコール学校になっているけれども、学校は教育のひとつの間ではあるけれども、すべての場じゃありませんね。最近、脱学校化といわれているのも、そう理解してよいと思います。またいままでの教育についての考え方は近代的な教育理念に立っていて、そこに教育は人間形成の場であるという考え方が基本的にあるのですが、人間教育しかも理性を中心に人間を主体にした考え方は近代主



荻野 恕三郎氏

義であって、この、ヒューマニズム、人間中心主義は二十一世紀には崩壊するだろう、いや既に今日崩壊しつつあると思うのです。また学校というものを基準に考えるような教育の仕方もあるだろうと思うのです。

つまり、学校という制度は人間を鋳型にのみこんで教育する、たくさん人間を特定の空間に置いて教えるわけですから、これから先、榊原さんが言われたように価値感の多様化が生じると、特定の中学校、高等学校、大学という学校単位の教育ではやっていけなくなると思うのです。生涯教育が強調され、家庭とか社会というものの教育に力を入れるウェイトが大きくなりつつあるのもその兆候かもしれません。だから、ぼくたちはいまの学校組織があるという前提で考えているけど、はた

してそれでよいのかどうか。

また現在の教育はいわゆる近代的な物の考え方でやっている。過去からの遺産をばくたちは学生に教えている。つまり過去からの教育なわけですよ。本当は現在からの教育、あるいは未来からの教育というものはあるはずですね。ここにおられるのはみな教師なんですけれども、やはり過去からの遺産に立ってものを言ってるんですね。しかし、それだけでこれからの問題に太刀打ちできるか。学生の感覚とぼくたちの感覚はだいぶずれていると思うのですけど、それでよいのかという問題があると思うんです。

いまのたとえばデモクラシーという形態とか資本主義社会とか、そういう体制がいちおう安定しているという前提でぼくたちはしゃべっているが、しかし過去一〇〇年を考えても、ずいぶん日本も変わってきているわけですね。近代と言いますと、ヨーロッパ中心主義で、ドイツとかフランスとかイギリスといった、ヨーロッパの小さい国が世界をリードしていましたが、今日はご存じのように民族国家ではなしに、連邦国家が世界を支配していますよね。政治や経済の体制のうつりかわ

りははげしいですね。だから、ぼくたちはいまの政治形態と経済形態がいちおう温存されて、いまの教育組織も存続するだろうという前提でしゃべっているけれども、そういう前提をご破算にして考える必要があるのではないか。

榊原 ちょっと質問なんですけど、人間中心主義の教育が崩壊するというのはどういう意味ですか。

荻野 大雑把な言い方をしますと、古代は自然というものに中心があった。中世は神にあった。近代は人間にあった。十九世紀からだんだん近代が崩壊してきますよね。近代が崩壊しているということは、人間中心主義が崩壊していることだと思うのです。これはひとつの考え方にすぎないという見方もありますけど、ヒューマニズムが少くとも近代的なヒューマニズムが崩壊しつつあることはたしかだと思えます。いまでも人間形成の場が教育であると、だれもが金科玉条のように思っているけれども、ぼくはそれではもうだめだという気がしますね。

榊原 それにかわるものは何ですか。

荻野 アクセロスという人が人類はいろいろ

ろなことを考えているようだけど、結局はたった自然と神と人間を軸にしてしかものを考えてこなかったといっています。それを軸にして時代が動いてきたということでしょう。か。おそらくこれからはアクセスが「遊星的な思考」といつているようなことが軸になると思うのです。つまりいままでは地球とか、太陽を中心に、考えてきたが、太陽もひとつの星だ、つまり特定の星を中心にしてないで、もっといろいろな星からものごとをみていくといった新しい考え方が出てくるのではないでしょうか。

榊原 そうすると、そういうなかで教育というものをどう考えるかというのが荻野さんのテーマですね。だいたい教師というのはいままで自分が勉強してきたこと——過去のことですね——に、いわば既得権益をもっているわけです。それ以外の、たとえばわれわれが知らない未来のことというのは教えることができないと思っているわけです。そういう形の教育というのがなくなるということでしょうか。

荻野 そういうことではないんです。たとえば近代の物の考え方として進化論がありま

すね。これは過去が根本にあって、過去からだんだん進化していくんだという考え方で。時の流れを過去から未来へと見る考え方でしよう。時の流れを一方的に過去から未来へというのはひとつの時間の理解であって、時間に現在から過去、未来へという流れもあるし、未来から現在へと流れてくる時間もあるわけでしょう。近代は自然科学を中心にした考え方ですから、過去から現在、現在から未来への流れしか考えてないわけですがね。教育にしても過去からの遺産を引き継いで若い者に与えているけど、そういう一方的な流れのなかに教育をみていいのかどうか、未来からの教育も当然ありうるわけですから。

浦野 すごい話だな、しかし(笑)。

『教育のあり方』

深田 教育は過去からの遺産を一種の既得権として教師が伝達していく、それがひとつの言い方だと思うのですけれども、それだけだろうか。そうすると知識というものは一体何なのか。いまはやりのトフラーの『第三の波』にも書いてありますけど、これからの社会には知的情報はもう満ち満ちていく。べつ

に学校へ行かなくても、知識といわれるようなものはだれでも十分に得ることができる環境になっていく。じゃ知識というものと知性とはどうなのか。トフラーの場合は、たしかに知識に満ちた環境が二十一世紀にかけてできていくけれども、その間、知性に混乱が起きるということを言っているわけですね。

ばくはやはり教育は単に過去の遺産としての知識の伝達だけではなくて、時代を先取りするようなプロセスだろうと思う。そうすると、教師と学生とは師弟関係ではあるけれども、同時にパートナーである。時代を先取りするための、あるいは先取りのプロセスとしての教育のパートナーである。このことは頭ではわかるんだけど、具体的に教育のプロセスのなかに生かそうとするとなかなかうまくいかない。でもそういう教育のパートナーとしての教師と学生と、そして時代を先取りしていくプロセスとしての教育は、二十一世紀にかけての教育の本質であり、われわれはそれをさけて通ることはできないだろうと思っているんです。

たとえば同志社の歴史を調べてみても、新島という人は単に過去の遺産の伝達だけが念



深田未来生氏

頭にあつて熱情を燃やしたのじゃなくて、時代を先取りしていくような先見の明というか、そこに熱情をもやすような人だったと思うんです。すくなくとも同志社の場合にはそういう人間的な遺産がある。だから出発点は、時代を先取りしていくプロセスとしての教育にあつたわけですね。

荻野 同志社はプロテスタントですね。プロテスタントはご存じのように近代に生まれたものです。それは良心とか自我というものを中心にした宗教形態ですね。同志社としていちばん考えなければならぬのは、近代におこつたものは近代とともに減じる可能性があるということです。現代に、あるいはこれからの時代に、同志社的な宗教、プロテスタンティズムというものが残っていけるかど

うかという問題を深田さんからうかがいたいのですが、ばくはルッター主義というのは近代主義だと思ふんです。個人と神との対決という信仰形式は明らかにそうです。

信仰のあり方、宗教のあり方の問題としても、新島先生の考え方は近代が続くかぎりにおいては妥当する宗教性を持ちえたと思うけれども、はたして新島先生の考えておられたような信仰形態、あるいは良心主義というものが、これからの時代にも維持できるかどうかということには、ばくはかなり問題を感じているんです。新島先生によつてたつた同志社のこれからの問題を考える場合に、やはり限界は近代だという気がするんです。たしかに同志社は近代では生きていけた。しかし二十一世紀以後やつていけるかということに關しては、いろいろと深い問題が出てくるような気がするんですが。どうでしょうね。あの大学紛争の時、神学部はつぶれなかった。そのことをバイタリティとみていいのかどうか。

深田 荻野さんは、近代は崩れると同時にそれに伴つてヒューマニズムも崩れる、人間中心主義の教育も崩壊すると断定的におつし

やるわけだけども……

荻野 いや、断定はしないですよ。ただ哲学に關して言いますと、十九世紀まではあくまで人間主義であつた。その人間主義は哲学に關しては崩壊しているわけなんです。だからそれが思想的なものだけの現象なのかどうかということですね。

深田 ばくは、崩壊するものは崩壊してもいいと思つてゐるんですけれども、やはり時と場合によつては崩壊させてはならないものがあるわけですね。たとえば新島の考えた教育理念や、時代を先取りするようなプロセスとしての教育にしても、その根底にあるスピリットは生かされながら、具体的な表現の仕方、その具体性においては変形していくことがあるだろうと。

だから現象としての近代は崩れていくけれども、その近代がもたらした非常に重要な、人間にとつて失つてはならない価値というものを、どうやつて鮮明にして、残していくか、それをパン種のように生かしていくことは教育のプロセスのなかで重要なことじゃないか。それこそ予言的なものが求められるでしょう。そこにこそ教師と学生がパートナー

ーとして時代の先を見、新しい価値観をつくり出していくかたちの教育が成立する。私学としての同志社の存在意義もまたそこにありとばかりは思う。ぼくは実際、教育は私学でなくちゃだめだと思ってますよ。公的な機関がひとつの価値感をつくって押しつけたらあるいは期待する人間像のようなものをさし示したりすること自身にすごい限界を感じますからね。だから本当の人間教育は、ぼくは私学でしかありえないというようなドグマをもっているんです。

〔具体的な教育の場で〕

市川 話を少しもとへ戻して、さきほど深田さんが提起された、いったい教育とは何かという問題を、もう一ぺん検討し直し、現実の同志社の教育の問題に入って、そこで重大な行き詰まりや崩壊や、理想から外れたところがあるとすれば、それをいったいどう直すべきかを考えてみませんか。

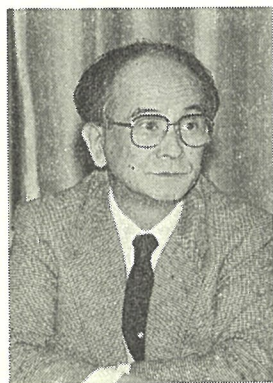
私は「創造論」というのをやっているんですけど、歴史発展というのは過去を背負っているわけです。しかし、過去の延長であっては創造にならないですね。デッドロックに

乗り上げて崩壊するわけです。過去の変換、再構成をやるのが、未来を突き当てることですけどそういう面では、さきほど浦野さんが、大学教育というのは個別的な専門分野に細分化されていて、教育としての統一性が失われているのではないか、という問題を出されたわけで、ぼくはまさにそのとおりだと思うんです。デカルト以来、近代の研究と教育は深く狭く細分化してきた。深くて狭ければ自分は偉いと思い、またそういう追究の仕方で成果があがってきた。それがいまやデッドロックに乗り上げた。これは自然科学でも明確なんです。自然科学の分野で境界領域研究というのが出てき、学際研究というのが、圧倒的な比重をもってきた。

ですからわれわれは、すくなくとも大学において、教育の全体性を失っているのではないか。教育の全体性を大学が失っているから、そこへ学生を送り込む高校も、その矛盾にさらされる。その一番のガンの存在は入試制度だと思うんです。入試制度のために、ペーパーテストの自己目的化が起きているわけで、この問題を断ち切らずして、大学へ来た青年を、大学の理想に応じてとか、私学の

理想に依拠して教育する、と言ってみたところで、もう遅いですよ。大なり小なり、中学校も高校も、生徒を上級学校へどのようにして入れるか。しかもランクの高いと世上言われているところへ、入れるかということに一生懸命で、生徒もまた夜を日に徹して塾通いしているわけでしょう。ここに現在の教育の荒廃の根本の動因があるわけです。ですから大学へ入ってきたときには、学生はもはや知的好奇心を失うてしまっている。しかし一貫教育の同志社中学、高校で育ってきた人は、それほどではないですよ。他から来た人は、そういう悪弊のなかにおるわけです。

新島先生のお話がさきほど出ましたが、私はプロテスタンティズムを踏襲することが、新島の継承ではないかと思っているんです。創造論的に言いますと、新島精神は戦國的なヒューマニズムだと思えます。同志社が明治初期の歴史社会に、あるいは大正へかけての歴史社会に、大きな役割をはたしたのはその戦國的なヒューマニズムであって、それは当時の思想形態で言えば、キリスト教であった、たまたまそうであったと、こういうふうには私は理解しております。



市川亀久彌氏

新島精神のもうひとつの要素は、明治期が大変革期であったということもあって、開拓者精神、パイオニア精神ですね。もし開拓者精神と戦闘的なヒューマニズムを、私どもの学園が失うならば、歴史を継承しないことになる。わけのわからぬ、戦後の水増し大学とあまり変わらないことになる。だから同志社が歴史を継承しながら、歴史の形骸に陥らないで、将来にたちむかうことができるかどうかというのは、この点にかかっているのじゃないか。

もとへ戻りますけれども、教育とは何かということが、狭い個別科学の専門分野に深いりした多くの大学教師の意識からはなれてしまっているのではないか。これはやはり一種の現代的な危機で、その危機を背後から支え

ているものは入試制度だと思っているのです。

浦野 これは多少未来のことにかかわるかわかりませんが、私は人間なんてあまり変わらないと思うのですわ、昔も今も。えらい妙な人間が出てきそうな印象をこれまでのお話を聞いて受けたんですけど、子供からだんだん大人になっていく成長過程を見ても、昔も今も同じだろうと。教育というのは、やはり先に生きた人間が、あとから生まれた人間にいろんなことを教えてやるということだろうと思いますね。したがって過去は当然ついてくる。そのうえで新しい創造の道も開けていく。きわめて常識的に私は教育というものを考えておるのですわ。

学校だけの教育という時代ではだんだんなくなってくる。これはそのとおりの思いますけど、しかし、教育というものには核がなければならぬ。そのためには学校はなければならぬものであるし、おそろしくならぬだろうと思うんです。そういう目で同志社というものを考えてみた場合に、さきほどからいろいろお話が出ておるわけですが、私も先取りするという姿勢が同志社の大きな特殊性で

あるといっぴよと思ひます。しかしさきに私が出したような問題について、同志社にマクロ的な形での前進がないとまさに先取りも不可能ではないかという印象をもっておるんですけどね。

さらに学校として、生涯教育に対応するシステムも必要ではないか。卒業してからでも同志社へ来ていろいろまた勉強できるというふうな、そういう講座をつくる方向が検討されるのが好ましいのではないでしようか。

榊原 一貫教育を拡充して、生涯教育の場として同志社を考えるべきだと。

市川 ぼくも同感ですね。入学試験制度のデメリットを最小限度にするには、一貫教育しかないわけですね。

それからもうひとつ、先取りに類することかもしれないが、新しい教育像をわれわれが提案することができれば、私学にとっても日本にとっても、有用なものではないか。私は京大から来たのですが、同志社をふくめて、有力私学は徐々に、徐々に国立大学の二番煎じのようになりつつある。何でも国立大学の模倣をしてよしとしている。しかしその国立大学は、もはや学園の府としても荒廢に向か

っているわけです。細分化された専門家が集まって、私はどこへ行ったらいいんでしょう、ということになりかけているんです。ただ困ったことには国家予算の裏づけによって財政が保護されているので、とことん行き詰まるところまで行っても、なかなか自己反省は起きない。しかし幸いにして私学は、経済的にデッドロックに乗り上げますから、社会的ニーズとあまりにもかけ離れれば生き残れないですね。そういう点で、自己改革の可能性をわれわれはもっている。だから、やろうと思えば、改革に着手できるのではないか。こういうところが、いま浦野さんがおっしゃったことと通じるところだと思います。

荻野 ぼくはこう思うんですよ。いまの大学教育は知識中心主義ですけども、そうやってきたのも、やはりぼくたちが学問とか真理というものを考えていく場合にテオリア、理論を中心にしてきた。ギリシア語で真理をアレテアといいます。これは、ひとつの真理観にすぎなかったんですけど、このアレテア的な物の考え方がヨーロッパ二千年を支配してきた。それは理性を中心にした考え方です。またそれは人間を視覚的な、見

る存在としてのみとらえたものです。人間には五感があるのですが、見ることに集中してしまった人間、あるいは考えるのが人間であるというホモサピエンス的な人間像ができあがったわけです。その理性を中心にした人間の理解が近代では崩れてきた。現在のマスメディアにしても、テレビにしても、いわゆる見るだけではないに、触覚的なものになっていますね。

さきほどから過去の遺産を受け継いで学校とか教育というものがあろうご意見もでたんですけども、理論とか理性を中心にした視覚的な学問形態というものは近代までで、その後は触覚とか身体というものが学問の世界にも当然入ってくると思うのです。そうすると学問そのものが変わってくる。過去の理論や理性を中心にした学問では押しているかなくなると思っていますね。

市川 そのかわりに、たとえばどんな……
荻野 だから視覚と理論だけでなく聴覚、触覚というよう。同志社は幸いにも三つ葉のクローバーで知情意、知だけではない学校なんですよ。しかしいま市川さんがおっしゃったように、日本では東大中心のピラミッ

ド型の学校形態になっていて、みな東大のようになろうとしているけれども、同志社とか私学のユニークさを出すためには、知だけではない学校や教育があるんだということをはっきり示すべきだと思うんですよ。くりかえすようですが、人間を中心にした、あるいは人間のなかの理性だけを中心にした人間観ではだめだと思うんですね。全人教育というところが可能かどうかは別として、視覚というものを中心にしない、人間のあらゆる機能というものを生かした教育じゃないといけないと思うんです。

市川 まったく同感です。

榎原 私は反対するつもりはないのですけれども、いまのお話を聞いているとどうも従来の学問批判ばかりであって、従来の学問はもう価値がなくなるんだというような印象をちょっと受けるのですがね。

私のやっている交通経済などはわからないことだらけで、わかっていることの方が少ないんですよ。しかし私は二十一世紀にも交通問題があると信じてうたがわれない。ですから、やっているんですが、たしかに交通問題のなかには経済で十分に理解しえない側面があ



榑 原 胖 氏

る。しかし私は一個の人間で能力に限界がある。経済のことだけでも十分理解できないのに、どうして政治や社会や心理の面まで領域をひろげることができるかと思うわけです。インターディシプリナリーな研究の必要性を否定するつもりはまったくありませんが、インターディシプリンを専門にすることはできません。インタディシプリナリーな研究が重要になると同じ程度にディシプリンへの沈潜も必要であるように思います……

市川 私には細分化を全面的に否定したわけじゃない。統一性、全体性を離れて、狭さと深さだけで展開してきた近代が行き詰まろうとしているので、全体性を回復しながら細分化しなきゃいかんということを申し上げているのでしてね。しかし、いままでの専門細分

化というのは、全体性をともすれば忘れがちなで進んでいるというのが、ノーバート・ウィーナーなんかの批判なんです。

そこで私ども、T型人間ということを言っておる。間口の広さをもちながら、深い専門に立脚することなんです。

榑原 わかりました。ただ教養課程というのはもともとそういうものをめざしていたといえるのではないか。それが全然機能していない。

それから今後の社会を考えますと、人間としてのゆとりをもたせるもの、たとえば絵を鑑賞するとか、音楽を聴くとか、運動をやるというようなことが重要になると思います。大学の教養課程はそのようなコースを重視すべきではないかと思っています。

深田 だれも専門化が悪いとか、そんなことは言っていないと思いますね。その重要性はみんな認めたうえで、これだけではだめだということと言ってるわけなんだけれども(笑)。

荻野 細分化していく考え方というのは、ヨーロッパ的と言ったら変だけれども、専門で専門で細分化していくことが進歩であるとい

う考え方は、やはり榑原さんの物の考え方の近代性だと思うんです。それで押していくなら押していっていいんですけど、やはり破綻がくるのじゃないか。

榑原 私もインター・ディシプリナリーなあり方に反対しているわけじゃない。異なる専門の人たちが集って共同研究をすることに反対しているわけでもない。ただ自分ができることというのは非常に限られているので、せまい領域に集中して勉強する以外にない。それでも自分が何か達成できるかどうか疑問なのです、あとのことはほかの方からうかがうということにしたいのです。

深田 市川さんのT型人間というのはおもしろいと思うんだけど、そういう表現は昔からあって、英語の表現でノー・エブリシング・アバウト・サムシング——何かについてすべてを知り、アンド・ノー・サムシング・アバウト・エブリシング——すべてのことについて何か知っているそういう人間ですね。大学には一般教養課程もあるんだけど、なかから中途半端で教える教師も学ぶ学生も、必要悪のように思っている。T型人間として立っていくためにはそれが必要なんだというの

ではなくて、なにかとってつけたようなものにすぎない。そして結局重点は専門に置かれる。その根源にあるのが市川さんは入試であると言われる。

ぼくは入試の悪も認めますけど、同時に卒業が悪である。卒業があるから、みんな入試に必死になるわけでしょう。だから卒業なしの教育が必要です。卒業なんてほんとうはありえない。生涯教育なんて言ったら、生涯卒業がないはずなんだから。なんでわれわれ卒業制度に固執するんでしょうね。

市川 深田さんにお答えします。かつての旧制大学時代には就学率も低く、大学を卒業した人たちは、何らかの意味で社会的な指導層に参加しておったわけですね。そういうときには、就職をまったく問題にしないで勉強する人も相当数、いたわけですね。ところが経済生活が豊かになるとともに、豊かさを維持するための収入が必要となった。そこで就職予備校的なファクターが、戦後いつのまにか大学のなかにうまれてきた。なぜ就職予備校かというと、大学を出ないと会社、銀行に入っても地位が上らない。つまり、人材を受けとる側が学歴主義をつくってしまった。知

的好奇心も十分なく、さらには選んだ専門にたいする適応性も十分な人がなぜ大学へくるかといえますと、卒業証書が社会への参入のパスポートになってきたからです。これについては、やはり社会全体の、学歴主義にたいする修正が要るわけです。その必要性を徐々には経営陣も自覚しはじめていると思います。

というのは皆さんご存じのように、一九七〇年代に日本は自動車においても、カメラにおいても、テレビにおいても、あるいは時計においても、世界最高の競争力をもったわけです。それは品質管理と生産性の勝利で、それ以上のものではない。新しい原理を発見し、新しい製品をつくるという点については、日本のメーカーは残念ながら五年、一〇年先の見通しをもっていないんですよ。そういう欠点を、自覚したある関西の経済団体は、少々欠陥があつて、ヒューマンリレーションが悪くてもいいから、創造力をもった人間が必要だと言ひ出した。創造力はまったく打算を無視して、知的好奇心に没入するといふヒューマンパターンが前提になつて、出てくるものです。創造性の技法を習ったから、

創造性が得られるというものではない。それはやはり全人的な問題です。つまり勉強を真の知的好奇心ないし人格的な発展に結びつけるような雰囲気が必要なので、それがなければクリエイティビティーなんて出てくるわけはない。

それからもうひとつ、あえて申し上げたいのは、人によって何がいちばん得意な分野であるかは千差万別ですね。これを十把一からげて、バツと平均点で切るといふような乱暴な採点方法は、やめてもらわねえらん。私は、このあいだもあつて申し上げたんですけれども、歴史上大きな仕事をしている人物を見ますと、大学入試に失敗したり、試験の点数が悪くて落第したりしているんですね。あるいは同志社でも徳富蘇峰は中退ですね。つまり、学歴が仕事をしているわけじゃないんです。いわんや平均点の高さが仕事をしているわけじゃない。

ですから、そういう点で、個性豊かに被教育対象を、人間的にも知的にも得意な部分を伸ばしてやるというような教育が必要なんですね。

深田 大学へ来たらもう手遅れだといふの

が結論ですよ、いまの話聞いてるとね。浦野さんのところもだいぶ手遅れに近いかもしれないけど、高校はどういうふうにごらんになってるのですか。

浦野 自分のところはあまりよく見えないのですけども、個性を豊かに伸ばせるということは、推薦制のおかげでたしかにあると思いますね。入試のための勉強をあまりやらないですから。しかし基礎的なものはちゃんとつかんで出てもらわないかんということで、成績の評価なんかもそういう立場からするわけですが。

深田 ところが、その基礎的なものとは何か。やはりいまの時代においては、一貫教育というものをいちおう掲げて私学として成り立っている同志社においてすらも、基礎的なものというのはきわめてデータの知識であって、ものをクリエーティブに考えるとか、人間がともに生きていくというようなことに關して心を砕くとかいうようなことじゃないというのが現実じゃないかと思うんですね。そうならざるをえないというような、それほど同志社も官僚化し、管理化されているのが現実でしょう。だから高校においても、

中学を考えても、同志社も一般の世の中の波にまったく乗ってるのじゃないか。

浦野 乗ってはならないと思いながら、苦勞してやっているとところじゃないんですか(笑)。どういうようにしたらほんとに同志社的な教育ができるか。一方で知識をおさめるということにたいする社会的な要求がある。

それを踏まえながら、しかもクリエーティブなものをつくれるような人間をどうして育てるかというのがわれわれの課題であって、そのためにどう生徒に接するか、どう教育するか、それに苦慮するのがわれわれの務めやと思っているわけですけども。

深田 知識はますますいろんな形で身につけることができるようになってくるけれども物を考える方法とか、それを可能にする感受性というのは、本を読むだけではできない。それはやはり共同作業を通して身につくと思うんですね。そういう意味で学校教育は意味があると思うんですね。

浦野 生徒にはそう言うところですよ。勉強だけするのやったら家庭教師を雇ってやつたらええ。学校というところはそういうところ

ろとはちがう。みんなで生活しているなかでいろんな経験をしていくのが大事やとね。まだ若いああいう時期ですから、たまには罅を外れて横道へそれるのもおりますけども、だいたいみんな活気をもってやっているのじゃないかと思います。

榊原 ここ二、三年、なにかそんなきざしもあるような気がしませんか。去年の卒業生で私のゼミの一番成績の良い学生が、フランク料理のコックになりたいというんですね。二番めのは自分はブランド輸出に昔から関心があつた、だからそれをやりたいというのでさっさとそういう方向で就職した。だから昔のように成績がいいから銀行へ行くとかいうパターンも少なくなってきたし、会社のほうも成績がいいから採ろうと思わなくなっていると思いますけどね。

市川 いま榊原さんが言われた方向はいい方向ですけど、ちがう例を申しますと、医科大学志望者を特別グループにして、特訓しているのがテレビでも出ましたし、現実にはたくさんあるんです。そこでは英語と数学だけを猛烈にやっているわけです。高等学校一年のときに、三年のものをやらしている。恐るべ

きことは、英語と数学の能力の高さが、医師としての能力にどういう関係するのかということを考えますと、まったくナンセンスですね。なぜこんなナンセンスが、まかりとおっているかというと、その原因は入試なんです。入試は英語と数学を最重点にしている。しかし英語と数学は本来医者になるための教養だと思うんですね。バックグラウンドにすぎません。医者になるために、ほんとに必要なのはヒューマンネイチャー、人間性、あるいは世界観というようなものである筈なのに、これは全然教えないのですよ。

ですから、榎原さんの言われたことがかなりの有力なデータであるとすれば、私学のよさは、いまやこれから発揮されようとしているんですね。

私はこのあいだ、あるところで、こういうことを聞いたんですけど、うちの高等学校から送られてきた学生の点数が低いとか何とかいって、大学側のほうから文句をつけるようなことが、ままあるらしいということ。私は文句言うたことありませんけど。

榎原 いまはそうじゃないんです。平均をだしてみると同志社の三高校から来た人のほ

うが成績がいい。

市川 その反対の場合が、ある学部であるようですけれど、それで文句をいうののじゃないに、推薦された者に対しては、高等学校を信頼してうけいれ、四年間にどう伸びるかを評価してほしいと思うんですね。それをやりませんと、高等学校に無言の圧力をかけて、受験勉強をやらせることになる。

私は、中学・高校は科目が多過ぎると思うんですね。教える量がむちゃくちゃに多いから、これをこなすのにふうふういって、知的好奇心とか、青春の喜びを分かつかいいうチャンスがなくなる。昔の第三高等学校の例なんか見ますと、ほとんどが酒飲んで、遊んでいるように見えるぐらい、みんな大声をあげていたたけです。いまの高等学校の生徒は、あまりにも受験勉強式トレーニングに追われているのではないのでしょうか。

浦野 まったくそのとおりです。大学の姿勢がそうであるかぎりは、やはりそれに対応せないかん。一定の高い水準の知識をもっていなければ大学へ来ることまかりならんというところでございますから、それを教えるという姿勢はもっています。なかには大学へすつ

と行けるということに安心感をもって、あまり勉強せんやつがおる。これはやはりちゃんと勉強させないかん。知識的な面の評価といわれるかもしれないが、これはやはりないといかん、しかしそれだけがまた強くなりすぎてもいいかん、というところ です。

市川 私は驚いているのは、この二、三年間の新入生に聞くのですけど、きみら『三太郎の日記』を読んだことがあるか、『マノン・レスコー』を読んだことがあるか、『出家とその弟子』を読んだことがあるかと。しかし答はゼロですね。青春時代に、日本人としての基本的なパーソナリティーに訴えるような書物が幾つかあるわけですね。それを読む暇がないらしいですよ、受験勉強に追われて。

浦野 いま本の話ができましたが、うちではそういうことを教科でやらせようということになって、国語科ではいろいろの本を読ませております。私、いま三年の選択で現代思想をやっておるのですが、夏休みに何か本を読んどけと言ったんですわ。明けてから、どんな本を読んだか聞いたら、夏目漱石だとかいろんなものも挙げておりました。「現代思想とあまり関係ないのやけどな。それ国語のほ

うで宿題出されたのところがうか」と言うのと、
そうですと言っていた。

そのほかちょっとおもしろかったのは、これも現代国語の授業やろうと思いますけど、いろんな先生に一時間ほど、話を聞きにくるんですわ。いわゆる聞き取りですね。「お話の内容からその先生の人間像を描けという宿題なんです。先生ひとつお願いします」「それはえらいこわいな」と言うて話したんですが、そんなふうな工夫はしているようです。

荻野 お話をきいていて思ったのですが、入試制度と学校の予備校化の害をあげつらうよりも、なぜそうなったかを考えることが必要なんじゃないでしょうか。

たとえば大部分の学生は同志社へ来たいからくるのじゃないに、高等学校の指導で、前はあそこに適当な能力の持主だということとでくるわけでして、大学にはランキングがあり、人間にもランキングがあつて、そのランキングとランキングの対応するところで、同志社に学生がくる。そういうように学校や人間をランキングするということの背後には生産主義があると思うんです。能力のある人、社会に貢献し得る人が偉いんだという現在の

価値観がある。そういう価値観があつて現在の学校制度もできているし、入試制度にあてはまる人間もつくっているわけなんです。だから現在の社会で生きていくには、ああいう入試制度がいちばんいい。

市川 そうでしょうかね。それがもう崩れつつあるのではないですか。

荻野 ええ、崩れつつあると思うんです。というのはアメリカがかつてそうだったんですが、アポロ計画なんかでクリエイティブな人間でなければだめだ、一般教養とか、人間を水平化しているような教育ではだめで、エリート教育をしなくてはいけないということになった。画一的な教育じゃなくて、一人一人が一本立ちした教育をしなきゃいけないとわかってきたわけですね。おそらく日本もだんだんそうなると思うんです。だからいまの東大を中心にした管理体制が核になった組織は、ぼくたちが反抗しなくてもいづれ崩れてくると思う。そうでないと日本が減じると思うんです。

市川 同感です。

荻野 入試制度という問題は、社会的背景があるから、一高等学校が、一大学が反対し

てもだめだと思っんです。社会構造が変わっていかざるをえないところにきているわけですから、そういう意味では楽観しているのですが……

ぼくはこれからの私学のことを考える場合に、東大を基準にしたような教育形態を破る魅力のある同志社にしないと、結局はミニ東大、ミニ京大になると思うんです。同志社の独自性はなくなると思います。しかし現在の段階ではミニ京大化しないと、同志社の存在理由はない。あるランキングのなかにあてはまって、いちおう細々と、関西の私学の間ではまあいばつておれる。しかし、ご存じのようにいまは何もかも東京中心で、東京の大学と関西の大学とははっきり差が出てきましたよね。以前は東大と京大の差はあまりなかったが、いまでは京大も地方大学になりつつある。そういうように教育のピラミッド化がすすんでいるわけです。しかし最近になって東大にうかった学生が他大学の医学部を選ぶこともあるようになってきたことは非常ににおもしろいと思うんです。だから医学部と同じような魅力のある同志社にせんと、結局はおすそ分けにあずかるというかつこうが

づくと思うんです。

市川 それを見つけないとして議論しているわけですね。官学ヒエラルキーに毒されないで、新しく次々と入学してくる青年諸君に対して、同志社を魅力的な存在にするためには、どうしたらいいかというのが、きょうのテーマの一つじゃないですか。

深田 市川さんがおっしゃっているのは、深い意味での人間中心的教育の再発見ですね。ところが荻野さんは、近代とともに人間中心的教育は崩壊していくという懸念をもっているわけでしょう。荻野さんは市川さんの考え方をどうとらえているのでしょうか。

荻野 人間中心主義、ヒューマンイズムは近代の指導的な理念ですけど、その理念のもとに建てられたのがフンボルト大学だと思えますし、そのすそ野にハーバードなんかがあると思うのですけど。しかしそういう近代主義的なフンボルト的大学というものでもうおそろくだめだろうと思う。さきほど市川さんは、これからは私学の時代だとおっしゃったんですが、ぼくはかなりその点は悲観的です。ね。

〔財政問題〕

というのは、現在の私学は経営上国家の財政におんぶしてもらっている。国家機構のなかにはいらぬと財政援助してもらえない。低成長の時代になれば授業料をどんどん上げていくということはできなくなるから、国家財政への依存度は高くなる可能性が大きい。

国家のきびんを損じてはいかんとすると、やはり東大型になると思うんですね。同志社が存在理由を積極的のうち出すためには、同志社独自の財政基盤をもたなければならぬと思うんです。それは容易なことではない。何か同志社独自の、国家に頼らないで、あるいはあまり授業料を取らないでやっていける方法はないものですかね。

楠原 私学の財政は、おっしゃるようになります。大学の経費のなかでは建物や備品の費用は比較的小さく、大部分は人件費です。企業とちがって物的な財を生産しているわけじゃないですから大学には生産性の向上ということがない。企業ですと人件費が上がっても、生産性の向上でもってカバーして価格をある程度抑えるこ

とができる。大学では人件費がふえればそれだけもろに経費の増大になるわけです。ですからぼくは学費のスライド制にあまり賛成じゃない。卸売物価にスライドするとかしたって、それはとてもだめで、大学の経費はもっともっと速い勢いでふくらむ。しかも大学の研究面を考えると、研究しなきゃならない対象はますます広がる。研究者も設備もふやしていかなければならない。一方収入の面では授業料の値上げに限界がある。また学生にとってほとんど無関係な研究に要する費用まで学生に負担させることは道義的にもおかしい。そうなると国庫補助か寄附金です。国庫補助が私学の独自性をそこなうというなら、寄附金しかないことになります。しかし日本の税制では私立大学にたいする寄附金は特に認可されるばあいをのぞいて免税ならぬ。税制が「ガン」です。あるアメリカの大学の学長が「日本のような税制がアメリカで適用されれば、アメリカの大学はほとんど全部倒産する」といったことがあります。日本の私立大学に独自の財源をもたせないようにしているのが日本の税制といえそうです。ですから私は日本の私学の財政問題については

かなり悲観的です。

市川 ぼくは現在の条件を固定して考えて、経済的に成り立たないという結論を出してはいけないと思っています。教育が社会全体において、重要な役割りを二十一世紀にかけて果し得るならば、その教育に必要な経費は、当然、その社会が提供すべきだと思ふですね。したがって、いかに二十一世紀の課題に因應得る教育をするか、いかに創造性ゆたかな学生をつくりだし得るか、その如何にかかって、学校の経済的運命は決まると思ふんです。国庫補助を受けても、国の言うとおりしないという手もあるわけですね。そういう点から考えて、お金の問題は先に設定して考えぬほうがいいと思います。それより二十一世紀へかけて、いったい大学教育がいまのような状態で残り得るかどうかのほうが、もっと深刻な問題だと思ふんですがね。

〔開かれた大学〕

浦野 これは二十一世紀の話ですから、とつびなことかもわからんけど、そういう財政状況であれば、生涯教育とひっかけて、卒業生も寄附という格好の学費を納めることにし

てはどうですか。

深田 「開かれた大学」ですね。生涯教育ということ言うならば大学のみならず学校がつねに開かれた場であって、いつでも戻っていける、学校がいつまでも自分のもので、そこにつねに自分の研鑽の場があるということでないといけない。ところが、いまの同志社は大学のなかですら非常に硬直した状態で、学部間の単位の交流なんて言いながら、ものすごく制限をもうけているわけですね。一貫教育と言いながら、各学校が自己主張をして、ほんとうに深い意味での交流がない。大学の教師も中学校へ行つて教えるとか、中学、高校の教師が特定の問題について大学に来て講義を担当するとかいうような交流がもっとあってもいい。それがいまは奇妙ななれ合いはあっても、すごく硬直した関係になっている。同志社は内でも外でも開かれた大学にならないければならない。

榊原 企業へ入って一〇年ぐらいたって、ああ、あのときもうちよつと勉強しておけばよかったとか、いまからでも勉強したいなあというようなこと言いますけど、それじゃオープンしましょうってだれが実際に戻っ

てくるでしょうか。そのころはみんな一番忙しいんですよ。

浦野 はじめのうちはそうかもわからんけど、魅力ある講座を開講していくうちに、会社へ行きながら学校へ出向するということが将来もつと一般的になるかもしれませんよ。その経費ぐらひは学費でも寄附でも容易にまかなえますよ。最初は校友会のような組織ではじめてもよいかもしれません。だいたい私立大学にとって寄附はきわめて重要な財源だと思ふんですよ。その寄附がない。

荻野 寄附がないということは、一〇〇年の歴史をへても同志社出身者のなかに日本をリードできるような卒業生がほとんどいないということですよ。ぼくは島根県の一地方の中学を出た人間なんですけど、その小さい中学校を出た連中に日本的な規模での人材がいるわけです。なぜ一〇〇年という歴史をもちながら、同志社は日本をリードできる人材を生めなかったかということは、考える必要があると思ふんですよ。

市川 全く同感です。

深田 ぼくは同志社出身じゃないから少し弁護すべきだと思ふんだけど、一般社会

的に格式というか、プレスティージというかそういうものをもった形での日本をリードする人間は出なかったかもしれない。大金持ちが出なかったかもしれない、大政治家は出なかったかもしれない、でもヒューマニティーの分野、人間中心な分野——宗教にしても社会福祉にしても、そういう面では出なかったわけじゃないでしょう。

荻野 ないではないですね。

深田 金につながるやつは出なかった(笑)。

荻野 このあいだ、ある先生から、同志社のなかで政治家を何十人つくるとかいいう考え方で教育される方があると聞いたのですが、ぼくはそれもひとつの方法だと思うのです。しかし百年の歴史をもちながら、なんでこんなにひ弱な学校になってしまったのかと思うんです。ぼくは同志社出身だからよけいそれを感じるんですよ。

榊原 やはり根性をもった人間を生まなかったんですね。人のええ人間を生んだ。

深田 根性をもった人間は辞めていった。市川 過去の批判は、もちろんそれで正しいと思いますけれど、今後どうすべきかとい

うことに、話題を切りかえますと、やはり大学の中に学問的プロダクティビティー、あるいはクリエイティビティーを展開する人々が次々あらわれなければいけません。それがあらわれないで、ただ情報の伝達機関、ブローカーみたいな教師ばかりになれば、人物もそだちませんでしょうね。私はここで、あえて提案しておきたいと思いますが、学問的成果をたつとぶような風潮を、大学はまず何としても、取り戻さなければならぬ。従来そうでなかったといえ、誤解をうみそうですけれど、どちらかといえば、学校行政的な、実務的な能力者はそれなりに評価され、それなりのリーダーシップはとられています。学問的プロダクティビティーについてはむしろ無関心、あるいは足のひっぱり合い、というようなことがかなりあったと思うんです。ぼくは、新しい学問を同志社で体系立てたんですけれども、ごく最近ですよ、みんなが認めはじめたのは。いままでは、あいつはおかしいとか(笑)、教壇の上から、市川は創造性というのをやっているそうやけど、創造性なんてものが、理論的に説明できるはずがない、というような講義を、あえてする人物がいたわ

けです。

つまり、クリエイティビティを尊重しようとするれば、その中身をよう確かめて、未知の分野を開拓しようとしている人間への、敬意をもたせないといふことなんです。そしてお互いに、クリエイティブなものを育て合おう。お互いが、もっている特徴を支援するという雰囲気がないといふかん。私は学内に一、二の研究会をもってますけど、全然専門がちがう人たちがやっています。みんな、その会合に出てきて生き生きとしています。それだけでもっている能力が引き出せるからですね。そういう意味では、教育者、学者間における生産的な、創造的な議論の場があまりなく、みな雑事に追いまわされているということことは、反省すべきじゃないかと思っています。

それから、女子大と大学との間の交流も少ないですね。ぜひ聞きたいと思うようなことがいろいろあります。たとえば、最近の女子大生は何を考えているか、共学の女子学生と、どちらがうかということなども知りたいです。けれども、情報を交換し合えるような場はないですね。個人的にちょこっとやれるだけで……

荻野 女子大もまったく同じですね。同志

社は私学ですから、教員の六割は同志社出身者であるべきだというのが多くの考えで、慶応とか早稲田は九割かそれ以上が出身者ですよ。ただその場合、なれ合いというのか、学問に対する意欲が停滞する可能性がある。

ひとつの問題は終身雇用制で、いったん助手になったら教授になるまで地位は安泰であることです。京大なんかは助手になったからといって必ずしも残れないわけでしょう。地位が安泰だといひ意けるといふことがおこります。そのために同志社出身者を啓発しう

る活力にみちた優秀な人たちに来て貰い共に(同志)としてお互いが異和感をもつことなくやってゆく。現在は幸か不幸か、同志社大学がчыよびりしかりしているといふことで高等学校とか女子高そして女子大がもてるわけです。しかし高等学校は高等学校の存在理由があつて、すぐれた高等学校だから優秀な生徒がくるのが本当であるのに、現実は大へ入れるからといふのでランキングが高いのではないのでしょうか。女子大にしても、同大がしかりしているから、その兄妹校だからいいだろうといふようなところがあると思

うんですね。だから女子大の独自性とか、高等学校の独自性はほとんどなく、あらゆる面で同大におんぶしているのじやないでしょうか。残念なことですが。

そこでばくが言いたいの、同大はもうすこししかりしてほしいといふことです。学問的にもしかりしてくれ、そして凡る面で、日本の学界をリードする人をどんどんつくってほしい。そして女子大は同大がなくなると十分にやってゆける独自の秀れた女子大にならなくてはならない。

〔宗教々育〕

櫛原 そろそろ時間がなくなってきたのでほんとうはいばんはじめにやらなければいけなかつたかもしれないけれども、深田さんもお見えになっていることですから、最後にひとつ、同志社の宗教教育はどうあるべきかといふことを……。

ばくは持論として、同志社のあらゆる役職はクリスチャンが占めるべきであると思つておるのですが……。

深田 なにか自然にばくのほうに顔が向けられているわけですけど(笑)、ばくは宗教教

育という表現そのものにちゅうちよを感じるわけですが、すでにいままでの討論のなかに相当深いところで私学同志社が、通常建学の精神といわれるものに関連してもっている価値観、それがやはり同志社の場合にはキリスト教であるということが指摘されました。ですから同志社が存在する以上、あるいは建学の精神が否定されない以上、十九世紀から始まったにしても、二十世紀、二十一世紀に向けてその真髓がたえず厳しく検討されて、教育のプロセス全体の基準となるべきだと思ふんですね。

ただそのときに、固定したひとつのキリスト教、それも制度化されたキリスト教という形だけで取り扱ふんじやなくて、ほんとに深い意味でのキリスト教の核になっているものが、歴史の曲がり角、曲がり角で再定義されていかなくちやならないと思つてます。そうしますとそれは当然、大学に位置する神学部といふところに相当の重みがかかってくると思ふんです。その点においては、ばくは同僚たちには悪いけれども、相当な自己批判の必要があるのではないかと考えています。

ただ、私はいまから二十一世紀にかけての

教育を考えるときに、建学の精神の真髄であるところのキリスト教、キリスト教の中核にあるところの、義と愛の神の存在というものを抜きにすることはできないと思っているんです。しかしそれは、なにもいままで存在してきた宗教教育的な活動を否定するのじやない。しかしただそれだけが重要なじやないということです。それすらも相当厳密に再検討され、未来に向かって進められる同志社の教育のなかでどういうような役割りを果たし得るかということを、とくにキリスト教の信仰というものに生かされている教職員が中心になって考えていく、それがやはり私学同志社のユニークさだと思うんですね。それがいままではたるんでたという表現はよくないけれども、いろんな意味で希薄になっていたと思います。

浦野 これはいちばんすそ野のほうの問題であるかもわからないですけどね。高等学校ではひとつの形式ですけども、毎朝礼拝して授業を始めるという形のなかから、キリスト教的なものを三年間で何かつかんで出てほしい。その根底になるのは、キリスト教的な愛というものであらうと思うんです。私は教職

員と生徒との生活の場でキリスト教的なものがごく自然にあらわれるようにするのが理想であると思うんです。それが完全に行われているとは言えませんが、努力はしています。

昔、ある父兄が言ったことですが、公立の高校へ行つたのと、同志社へ来たのと二人子供がある。同志社へ来た子は非常に思いやりがあるということを言うておりました。ですからそういうようなことを中高の段階では目標にしていくのがいいんじゃないかと思えます。

それから大学のことなんですが、先ほど問題になりました細分化されておるとか、お互いの交流がもう少しあってもいいのじやないかということが反省されるなかに、結局キリスト教的な精神の欠陥というものがあるのじやないか。細分化と交流の欠如にたいしては自由な立場で考えるということが必要ではないか。マクロ的な全体的な構成というものを学問のなかでつかんでいくことができるためには、自由な精神がないと、わしの立場はこうだということで、自分の立場だけ主張することになる。やはりキリスト教的なというか

宗教的などうか、別の表現をかりれば無規定性といえますか、そういう立場が必要だろと思う。そのように物を考えるのが同志社じゃないかと、私、勝手に思うんですけどね。

深田 いまのにつけ加えますと、ぼくは同志社にかかわるようになって二〇年近くなるんですけども、いい意味でも悪い意味でも自由というものが同志社の特色として存在すると思っています。深い意味での自由とは何か。聖書のなかに「真理は汝らに自由を与えらる」とありますが、ところがあの言葉はそれだけじゃなくて、その前に「私のうちにいなさい」というのがあるんですね。それが前提なんです。私のうちにいれば真理がわかる。その真理はあなたたちを自由にする、これがほんとうにわれわれがめざすべき同志社における自由だと思います。その「私のうちにいなさい」という部分が往々にしてあいまいになったりばやけたりしていて、真理とか自由というものが切り離された形で同志社全体にときおり存在しているといえましょう。

だからもう一ぺんその辺を整理して、二十一世紀にむかうべきだろと思うんです。

荻野 さきほど深田さんが、宗教教育という言葉にちゅうちょを感じると言われたのはどういう意味で言われたか、お聞きしたいのですが。それはそれとして、ぼくは宗教と教育とか、文化というものは根本的には重なるものではないと思うのです。宗教的文化とか、宗教的教育というものの存在が理論的にはむづかしいと思いますね。

とにかく同志社はキリスト教主義の学校です。これは、はっきりしているんです。だから、あまり遠慮しないで堂々と宗教を前面におしだしてやってほしいと思う。なにか遠慮してこそそとやっておられるような気がするのですね。女子大のほうは、同大よりはまだすこしは大胆にやっていると思うんですが。なにか学問というものの陰に隠れて、しかもその学問が、市川さんがおっしゃったように影の薄い学問で、創造性も少ないんですけれど……。ともかくもうすこし堂々とやってほしい。宗教と学問とは、学問のなかに宗教があるという関係じゃなく、相互に独立したものです。だから学問のかげにかくれる必要はない。大胆にやっていただかないと同志社の存在理由がなくなると思いますね。

ただ、さきほど申したように、同志社のキリスト教が近代の産物だという問題があるので、それにどう対処していくかということを神学部として考えていただきたいと思っていますね。

市川 私は榊原さんと意見を異にします。あらゆる役職者はクリスチャンであるべきだというのは、アナクロニズムだと思いますね。新島先生がお始めになったころは、それでよかったと思うのですが、いまはキリスト教だけが宗教的真理ではないわけですし、すくなくとも、新島襄の精神を受け継いでいるのは初期キリスト教的ヒューマニズム、戦闘的ヒューマニズム、それからパイオニア精神というものであったと思うんです。クリスチャンであるかどうか、洗礼を受けているかどうかを、あまり問題にすれば、困ったことが起きると思うんです。学長がクリスチャンでなければならぬという規定があるとすれば、選挙の前に、にわかに洗礼を受けてクリスチャンになるのというようなことがおこるかもしれない。

そうなれば悲劇的です。クリスチャン規定は、逆に薄れさしていくべきだと思います。

受け継ぐのはクリスチャンであるかどうかではなしに、明治期におけるキリスト教的精神なんでしょう。

荻野 市川さんの宗教に対する理解のなかに、ヒューマニズム的というお言葉がありますが、宗教はヒューマニズムじゃないと思いますよ。ヒューマニズムのもとに宗教を置いたら本末転倒です。

市川 宗教のなかに含まれているヒューマニズムを、受け継ぐと言うておるんです。

荻野 それが間違いだと思うんですよ。

市川 それは意見の相違であってね。

荻野 宗教の理解としてはやはりまちがっているとはぼくは思いますね。

市川 そうですかね。ぼくはぼくの思想体系をもって話しているわけですがね。

榊原 議論はこれから佳境にいるところかもしれないが、ぜひ長い時間になりまして、これで座談会を終わらしていただきます。

(一九八〇年・十二月十日・於京都私学会館)